

短縮版自己評価感情尺度の作成

原 田 宗 忠 (愛知教育大学 教育臨床学講座)

Shorten version of Self-Evaluation Affect Scale

Munetada HARADA (Department of Clinical Psychology and Practical Studies
in School Education, Aichi University of Education)

要約 本研究では、溝上 (1999) の自己評価尺度の短縮版である自己評価感情尺度 (SSEAS) の作成を行った。これまでの自己評価感情を測定する尺度は、尺度内の項目数が多かったり、自己評価の肯定次元と否定次元の区別がされていないなど、個人基準の自己評価と社会基準の自己評価の区別がされていないなどの問題点があった。本研究は調査1と調査2から成っており、両調査に参加した131名の大学生のデータが用いられた。探索的因子分析を行い、内的整合性と妥当性が検討された。その結果、短縮版自己評価感情尺度は、「個人基準-肯定的自己評価感情」、「個人基準-否定的自己評価感情」、「社会基準-肯定的自己評価感情」、「社会基準-否定的自己評価感情」の4因子から構成された。各因子における α 係数は高く、他の関連する変数との相関関係は概ね予想通りであった。また、調査2では再検査信頼性の高さも確認された。

Keywords : 自己評価, 自尊感情, 個人基準, 社会基準, 尺度

問題と目的

人は自分を振り返る中で、全体的な自己 (global self) に対する評価をしばしば行う。その際、他者との比較や社会の基準と照らし合わせて評価する場合と、自分自身の基準と比較して評価する場合とがある。前者の自己評価は社会基準の自己評価と呼ばれ、後者は個人基準の自己評価と呼ばれている (溝上, 1999)。なお、後者のように個人基準で全体的自己を評価する際に生じる評価感情については自尊感情 (Self-esteem) と呼ばれ (遠藤, 1999; James, 1891 今田訳 1956; Rosenberg, 1965), 不安や抑うつ (Pyszczynski & Greenberg, 1987), 幸福感 (Diener & Diener, 1995) といった精神的健康や、非行 (Baumeister, Campbell, Kruger, & Vohs, 2003) や不登校 (粕谷・河村, 2004) などの社会的適応と関係していることが指摘されてきた。また、自尊感情が高いことは精神的健康や社会的な適応のよさと、自尊感情が低いことは精神的不健康や社会的な適応の悪さと関連していると考えられてきた。なお、自尊感情と精神的健康や適応との関係を明らかにする際に、自尊感情を測定する尺度は重要なものであるが、これまで用いられてきた自尊感情尺度には、後述する観点が十分に考慮されていないという問題点が存在している。

本研究では、自尊感情という個人基準の自己評価感情と、社会基準の自己評価感情とを簡易に測定する尺度、すなわち全体的自己に対する自己評価感情を測定する尺度の作成を目的とする。なお、個人基準の自己

評価感情を測定する自尊感情尺度に関しては、これまでに多くの研究がなされてきた。しかし、社会基準の自己評価感情を測定する尺度については溝上 (1999) の自己評価尺度における社会基準の因子項目があるものの、十分な研究の蓄積がなされてきたとは言いがたい。そのため、まずは自尊感情尺度に関する研究を中心に検討する中で、個人基準と社会基準の自己評価感情を測定する尺度の作成にあたって考慮すべき観点を整理することにする。

自尊感情は全体的自己に対する評価の結果生じる感情ではあるが、様々な自己の側面に対して行われる自己評価の単純な総計から成っているわけではない。個人が重要視している自己概念の領域に対する評価の影響を自尊感情は受けやすいこと、重要視していない自己概念の領域に対する評価からの影響は重要視している領域と比べて影響が少ないことがわかっている (Moretti & Higgins, 1990; 溝上, 1999)。また、自己のどの領域を重要視するかは、個人によっても、人種、文化、男女によっても異なっている (Crocker & Wolfe, 2001; 内田, 2008)。したがって、全体的自己に対する自己評価感情を測定する尺度の作成に際しても、特定の自己概念の領域に関する評価感情を尋ねるような質問文を用いるのではなく、全体的自己そのものに関する評価感情を尋ねる質問文を用いる必要があると思われる。

自己評価感情の高さを考える際には、自己評価感情が肯定的でもあり否定的でもある人、自己評価感情が

肯定的でもなく否定的でもない人の存在なども考える必要がある。たとえば、溝上（1999）が肯定的自尊感情と否定的自尊感情とを区別した上で行った調査によると、青年期においては、肯定的自尊感情が高く否定的自尊感情が低い者や肯定的自尊感情が低く否定的自尊感情が高い者だけでなく、肯定的自尊感情も否定的自尊感情もともに高い者や、肯定的自尊感情も否定的自尊感情もともに低い者もいることが明らかになっている。また、Owens（1993, 1994）は、肯定的自尊感情と否定的自尊感情では、うつなどに対するパス係数の大きさの絶対値に差異がないとは言えず、肯定的自尊感情を上昇させることと否定的自尊感情を低下させることは同一でないことを指摘している。以上のことから、自己評価感情の測定を考える際には、自己評価感情が“肯定的であること”と“否定的であること”を同一次元上の両極として捉えるのではなく、別次元のものとして区別する必要があると思われる。

全体的自己に対して評価を下す際の評価基準を考慮することも、自己評価感情を考える際に重要である。たとえば社会的な基準で自己を見た際に自分が他者より劣っていると感じたとしても、自分の基準で自己を見た際に自分自身に満足していると感じる場合には、個人基準の自己評価感情は肯定的なものになると言える。また、社会的な基準で自己を見た際に自分が他者より優れていると感じたとしても、自己の基準を非常に高く設定しておりその評価基準によって自己を見た際には自分に満足していないと感じる場合には、個人基準の自己評価感情は否定的なものになると言える。このことから、個人の基準に照らし合わせた上での評価感情と、社会的な基準に照らし合わせた上での評価感情とを区別することが重要であると考えられる。

また、Rosenberg（1965）は、very good（非常によい）という自己評価と、good enough（これによい）という自己評価とを区別している。そして、Rosenbergの自尊感情尺度は、自分自身が定めた基準で自己評価が高いか否かを目的として作られており、good enoughの自己評価があるか否かを測定している。しかし、溝上（1999）は、同じように自分の基準を満たして自己に満足している者の中でも、社会的な基準も満たしているvery goodな自己評価の高さがある者と、社会的な基準は満たしていないgood enoughな自己評価の高さの者との区別を、Rosenbergの自尊感情尺度によって行うことは難しいと指摘している。つまり、尺度の作成にあたっては、社会的な基準も満たしている自己評価と、そうでない自己評価とを区別する必要があると言える。

個人基準の自己評価感情である自尊感情の高さを測定する際によく使われる尺度としては、Coopersmith（1967）のSelf-Esteem Inventory（自尊感情質問票）やRosenberg（1965）のSelf-Esteem Scale（自尊感情

尺度）などがある。Coopersmith（1967）の尺度においては、勉強に関することや対人関係に関することなど様々な自己概念の領域に関する自己評価を尋ねることによって、全体としての自己に対する評価を測定している。しかし、前述したように個人間で重要視される自己概念の領域の違いがあることを考えると、重要視される領域の差異を考慮せずに各領域に関する自己評価得点の合計を自尊感情得点とすることは、妥当性の点で問題があると思われる。一方で、Rosenberg（1965）の自尊感情尺度は、特定の自己概念に関する評価感情を尋ねるのではなく全体的な自己に対する評価感情を聞いているため、自尊感情尺度としての妥当性は高いと考えられる。しかし、“4：私は、たいいていの人と同じくらいには物事をやれる（筆者訳）”、“7：私は、少なくとも他者と同じくらい価値ある人間だと思う（筆者訳）”など、質問項目の中に、社会的基準で自己をとらえた際的评价感情を尋ねていると考えられる項目も存在する。また、Rosenberg（1965）の尺度は多くの研究において1因子構造が支持されているものの、研究によっては2因子構造となることがあり（Tafarodi & Swann, 1995）、因子構造に不安定さも見られる。

以上の観点を考慮して作られている尺度として、溝上（1999）の自己評価尺度がある。この自己評価尺度では、質問文は全体的自己に関する評価を尋ねる文章になっている。また、個人基準と社会基準の自己評価の区別や、肯定次元と否定次元の区別もなされており、Y-G性格検査や適応意識との間で妥当性の検討も行われている。ただし、4因子（“SOCIAL”、“PERSON”、“SOCIAL-N”、“PERSON-N”）、各7項目の合計28項目から成っており、その質問項目の多さ、質問文の長さや表現の難解さ（“私は、自分の知っている人々が、いつかは自分を尊敬の眼をもってあおぎみる日がくると確信しています”、など）からは、使用する際の回答者の負担が大きいと思われる。また、Y-G性格検査や適応意識以外の尺度との間での妥当性の検討や、再検査信頼性の検討が行われておらず、妥当性と信頼性の確認が十分ではないと思われる。さらに、質問項目内に、自己評価というよりも自己評価の不安定さを測定していると思われる項目（“日によって、自分自身を好きになったり、嫌いになったりします”など）が含まれているという問題点がある。

以上の観点を踏まえると、領域別の自己ではなく全体的自己に関する評価を問うこと、肯定次元と否定次元の区別および、個人基準と社会基準の区別を行うことが大切であると思われる。これらの観点を踏まえて、本研究では短い時間で回答可能な、全体的自己に対する自己評価感情を測定する尺度の作成を行う。

方法

調査対象者・分析対象者 一般教養科目の心理学概論の授業終了後に行った。調査は1週間の間隔をあけて、2回にわたって行われた。調査1は、中部、中国地方の大学生219名（男性153名、女性66名）を対象に、調査2は、中部、中国地方の大学生187名（男性129名、女性58名）を対象に行われた。2回の調査に参加した者のうち、記入漏れのあった7名を除いた131名（男性87名、女性44名、平均年齢19.31歳（ $SD=1.18$ ））を、調査1および調査2の分析対象者とした。なお、調査1と調査2の調査対象者の照合は、携帯電話の番号の下5桁を尋ねることによって行った。

測定尺度 測定は以下の7尺度を用い、評定はすべて5件法で行った。なお、調査1では短縮版自己評価感情尺度の因子分析を目的としたため、1.の尺度のみを用いた。また調査2は再検査信頼性の検討と短縮版自己評価感情尺度の信頼性と妥当性の検討を目的としたため、1.から7.の尺度を用いた。

1. 短縮版自己評価感情尺度 (Shorten version of Self-Evaluation Affect Scale) 個人が自分自身の評価基準に照らし合わせて全体的自己を評価する際に生じる評価感情を測定する尺度として、短縮版自己評価感情尺度を作成した。短縮版自己評価感情尺度の項目作成にあたっては、まず、個人の基準と比較したうえで全体的自己を評価する際に生じる評価感情として、肯定次元および否定次元の個人基準自己評価感情の2因子を想定した。また、社会の基準に照らし合わせて全体的自己を評価する際に生じる評価感情として、肯定次元および否定次元の社会基準自己評価感情の2因子を想定した。つまり、短縮版自己評価感情尺度全体で合計4因子を想定した。

個人基準自己評価感情を測定する項目の作成に関しては、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度および溝上 (1999) の自己評価尺度の項目を参考にしつつも、個人の基準と比較した上で自己評価を行うということが明確になるように文章を工夫した。また、肯定次元と否定次元とを区別して項目を作成し、肯定次元、否定次元ともに4項目ずつ、合計8項目を設けた。

社会基準自己評価感情を測定する項目の作成に関しては、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度および溝上 (1999) の自己評価尺度の項目を参考にしながらも、社会的な基準と比較した上で自己評価を行うということが明確になるように文章を工夫した。また、肯定次元と否定次元とを区別して項目を作成し、肯定次元、否定次元ともに4項目ずつ、合計8項目を設けた。

2. 自己評価尺度 短縮版自己評価感情尺度の併存的妥当性検討のために、溝上 (1999) の自己評価尺度28項目を用いた。この尺度は、前述したように、個人基準と社会基準の自己評価の区別、肯定次

元と否定次元の区別を考慮した上での自己評価尺度となっており、4因子 (“SOCIAL”, “PERSON”, “SOCIAL-N”, “PERSON-N”), 各7項目の合計28項目から成る。

3. 自己肯定意識尺度 自分の基準に照らし合わせて自己評価を行った際に肯定次元の自己評価が高い者は、自己を受容している傾向が高いと思われる。そのため、個人基準における自己評価感情に関する因子の収束的妥当性検討のために、平石 (1993) の自己肯定意識尺度を用いた。自己肯定意識尺度は対自己領域19項目、対他者領域22項目の41項目から成る。本研究では、3成分によって合成される対自己領域のうち、自分の個性への尊重や信頼から成る“自己受容”成分の4項目を使用した。

4. 生活感情尺度 自分の基準に照らし合わせて自己評価を行った際に否定次元の自己評価が高い者は、全体的な自己を受容しにくい傾向があると思われる。そのため、個人基準における自己評価感情に関する因子の収束的妥当性検討のために、内田 (1990) の生活感情尺度を用いた。生活感情尺度は、“対人関係”、“自己認知”、“現実目標”、“理想目標”の4領域における生活感情を測定する全32項目から成る尺度であり、全項目は5因子で説明される。本研究では、“自己認知”の領域に関する質問項目の中で、自己を受け入れることのできない感情を意味する“自己萎縮の因子”4項目を使用した。

5. 自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) 社会的な基準に照らし合わせて自己評価を行った際に肯定次元の自己評価が高い者は、他者に対する優越感も高いと思われる。そのため、社会基準における自己評価感情に関する因子の収束的妥当性検討のために、小塩 (1999) のNPI-Sの中の、“優越感・有能感”因子10項目を用いた。NPI-Sは自己愛傾向を測定する尺度で、3因子からできているが、“優越感・有能感”因子は、自分への強い自信や他者に対する優越感を反映する項目から成る。

6. 対人不安傾向尺度 社会的な基準に照らし合わせて自己評価を行った際に否定次元の自己評価が高い者は、他者からの否定的な評価を気にしていると考えられ、他者と関わることに不安を感じやすい傾向があると思われる。そのため、社会基準における自己評価感情に関する因子の収束的妥当性検討のために、松尾・新井 (1998) の対人不安傾向尺度の中の、“否定的評価懸念”因子7項目を用いた。対人不安傾向尺度は対人場面での不安の感じやすさを測定する尺度で3因子からできており、児童を対象に作られた尺度ではあるが、文章の内容からは大学生に用いることも可能であると考えられたため、使用した。

7. 日常ストレス対処行動調査票 自分の基準と比較した場合であっても社会の基準と比較した場合

であっても、肯定次元の自己評価が高い場合には自己効力感 (Bandura, 1977) も高い傾向があると思われる。そのため、ストレスフルな出来事に面しても自ら問題解決が可能であると考えて、問題焦点型コーピングのように (Lazarus & Folkman, 1984 本明他訳 1991) 自分で解決策を模索するような積極的なコーピングを用いやすく、消極的なコーピングはあまりとらえないと考えられる。逆に、自分の基準と比較した場合であっても社会の基準と比較した場合であっても、否定次元の自己評価が高い場合には自己効力感が低い傾向があると思われる。そのため、自分では問題解決が難しいと感じて、問題解決に積極的には取り組まずに我慢してやり過ごすなどの消極的なコーピングを用いやすいと思われる。また、社会的な基準に照らし合わせて自己評価を行った際に否定次元の自己評価が高い者は、ストレスに直面した際に、他者と接すると自分が他者より弱いことや劣っていることをより強く感じてしまうことを恐れて他者を避けて自分で我慢しやすい可能性が考えられる。その一方で、社会的な基準に照らし合わせて自己評価をする際に肯定次元の自己評価が高い者は、そうした恐れを感じにくいために、他者との接触に対してあまり消極的にはなりにくいと推測される。

ただし、直面した問題が解決の難しい問題である場合には、自分の基準と比較した場合の肯定次元の自己評価が高い人や、社会の基準と比較した場合の肯定次元の自己評価が高い人も、消極的なコーピングを取りやすい可能性が考えられる。また、社会的な基準に照らし合わせて自己評価する際に否定次元の自己評価が高い者であっても、信頼できる他者に対しては相談しやすいことも考えられる。これらを考慮すると、自己評価の高さと各コーピングの方法との相関関係は比較的小さいと思われる。

以上を踏まえて、個人基準における自己評価感情に関する因子と社会基準における自己評価感情に関する因子との弁別的妥当性の検討のために、辻・塚本・岡田・近喰・川田・杉江・永田・宗像・吾郷・石川 (1999) の日常ストレス対処行動調査票33項目を用いた。なお、日常ストレス対処行動調査票の因子構成は研究によって異なっているが、古野 (2005) は本尺度を再度因子分析した上で辻ら (1999) とほぼ同じ因子分析結果を確認している。したがって、本研究では古野 (2005) における因子構造を用いることにし、“問題への取り組み”“対人接触”“陰性感情発散”“自己統制”“気晴らし・自己肯定”の5因子を使用した。

結果

短縮版自己評価感情尺度の因子分析結果 短縮版自己評価感情尺度の因子構造を検討するために、主因子法、直接オブリミン回転による因子分析を行った。あ

らかじめ、個人基準の肯定的自己評価感情、個人基準の否定的自己評価感情、社会基準の肯定的自己評価感情、社会基準の否定的自己評価感情の4因子を想定した尺度であるため、抽出する因子数を4と指定した。また、因子負荷量の絶対値が.40以上で、複数因子に.35以上重複しない項目という基準を設けて、基準に合致しない項目を削除した。

その結果、第1因子は3項目から構成され、“今の自分が好きである”“今の自分に、満足している”など、自分の基準で自己評価をした際の肯定的な自己評価を表す項目から成っていた。したがって、第1因子を“個人基準－肯定的自己評価感情”と名付けた。第2因子は3項目から構成され、“自分のなかに、変えたいところがある”“自分のだめなところが気になる”など、自分の基準で自己評価をした際の否定的な自己評価を表す項目から成っていた。したがって、第2因子を“個人基準－否定的自己評価感情”と名付けた。第3因子は3項目から成り、“まわりの人はみな、自分よりすぐれていると思う”“なにをしても、自分は人にはかなわないと思う”など、社会の基準で自己評価をした際の否定的な自己評価を表す項目から構成されていた。したがって、第3因子を“社会基準－否定的自己評価感情”と名付けた。第4因子は3項目から成り、“自分には、人に負けないものがある”“自分のなかには、人に自慢できるところがある”など、社会の基準で自己評価をした際の肯定的な自己評価を表す項目から構成されていた。したがって、第4因子を“社会基準－肯定的自己評価感情”と名付けた。なお、4因子の累積寄与率は56.13%、 α 係数の値は第1因子から順に.70、.78、.72、.78であった。Table 1に、因子分析結果と因子間相関、各項目の平均値とSDを示す。また、Table 2には因子間相関行列を示したが、“個人基準－肯定的自己評価感情”と“個人基準－否定的自己評価感情”との因子間相関は-.30、“社会基準－肯定的自己評価感情”と“社会基準－否定的自己評価感情”との因子間相関は-.48であった。

なお、“個人基準－否定的自己評価感情”における“自分のなかに、変えたいところがある”と“自分のだめなところが気になる”の項目に関しては、平均+1SDの値が、取りうる最高点の5点をそれぞれ超えており、回答の分布に偏りがあると言えた。本研究では、自己受容をしており自分の中に変えたいものがない者や、自分のだめなところがあまり気にならない者も多いと考えて、個人基準の否定的自己評価感情を測定する内容として問題はないと判断して、これらの質問内容を設けていた。しかし、今回の調査対象者が所属する青年期は、環境の変化によって新しい経験をする中で、自己概念や自己評価が揺さぶられ、自己評価が否定的になりやすい時期と言える (溝上、

Table 1
短縮版自己評価感情尺度の因子分析表 (N=131)

項目番号	因子					平均 (SD)
	F1	F2	F3	F4		
F1 14	.87	-.04	-.09	.04	2.84 (1.09)	
5	.42	-.32	.05	.09	2.69 (1.12)	
1	.41	.19	-.21	.32	3.53 (1.05)	
F2 10	.03	.79	.18	-.05	4.11 (.91)	
2	-.11	.69	-.07	-.01	4.08 (.91)	
8	.06	.68	.04	.04	4.37 (.71)	
F3 6	.13	.11	.68	-.03	3.46 (.96)	
16	-.30	.13	.63	.05	3.36 (1.17)	
12	-.09	-.08	.56	-.12	2.89 (1.06)	
F4 15	.00	-.04	.12	.88	3.02 (1.03)	
9	-.10	.04	-.15	.67	3.02 (1.12)	
7	.15	-.03	-.06	.61	3.27 (1.09)	

F1：個人基準－肯定的自己評価感情 F2：個人基準－否定的自己評価感情
F3：社会基準－否定的自己評価感情 F4：社会基準－肯定的自己評価感情

Table 2
短縮版自己評価感情尺度の因子間相関

因子間相関	F2	F3	F4
F1	-.30	-.28	.46
F2		.25	.05
F3			-.48

F1：個人基準－肯定的自己評価感情
F2：個人基準－否定的自己評価感情
F3：社会基準－否定的自己評価感情
F4：社会基準－肯定的自己評価感情

1999)。そのため、調査対象者が青年期に属していたために、これらの質問項目に対して高い点をつけた者が多かった可能性が考えられる。また、これら2つの項目の回答の分布においては、1点や2点といった低い点数をつけた調査対象者も15%前後いたことから、これらの項目が個人基準の否定的自己評価感情が特に低い者を判別できない項目とは言えないと考えられる。また、これらの項目を含む因子全体では、平均+1SDの値が14.90であり、取りうる最高点の15点を下回っていたことから、本研究ではこれらの質問項目を削除せずに採用することとした。

なお、今回抽出された4因子（個人基準－肯定的自己評価感情，“個人基準－否定的自己評価感情”，“社会基準－否定的自己評価感情”，“社会基準－肯定的自己評価感情”）は、各因子の内容から、当初の仮説における4因子（個人基準の肯定的自己評価感情，個人基準の否定的自己評価感情，社会基準の肯定的自己評価感情，社会基準の否定的自己評価感情）に相当すると考えられる。また、当初の仮説における4因子に対応させて用意した質問項目はすべて、因子分析の結果、仮説における因子と対応する因子内に分類されていた。

最後に各因子に対し、男女間における得点差の有無の検討を行ったが、いずれも有意差は見られなかった。

個人基準－自己評価感情因子の妥当性の検討 個人基準－自己評価感情因子2因子の基準関連妥当性を検討するために、各尺度との相関係数を算出した（Table 3）。なお、Table 3および以下の記述では読みやすさを考えて、短縮版自己評価尺度の4因子においては因子分析で抽出された順ではなく、“個人基準－肯定的自己評価感情”，“個人基準－否定的自己評価感情”，“社会基準－肯定的自己評価感情”，“社会基準－否定的自己評価感情”の順で記述していく。

“個人基準－肯定的自己評価感情”は、溝上（1999）の自己評価尺度の“PERSON”との間に、.79の相関が見られた。また、自己肯定意識尺度における“自己受容”との間には.57の相関が見られた。日常ストレス対処行動調査票に関しては、“問題への取り組み”との間には.16の有意傾向の相関と“自己統制”との間には-.18の有意な相関が見られ、“気晴らし・自己肯定”との間には.25の相関があった。

“個人基準－否定的自己評価感情”は、溝上（1999）の自己評価尺度における“PERSON-N”との間に、.72の相関が見られた。また、生活感情尺度における“自己萎縮の因子”との間には.68の相関がみられた。なお、日常ストレス対処行動調査票の各因子に関しては、“自己統制”との間に.17の間に有意傾向の相関が見られた。

社会基準－自己評価感情因子の妥当性の検討 社会基準－自己評価感情因子2因子の基準関連妥当性の検討をするために、各尺度との相関係数を算出した（Table 3）。“社会基準－肯定的自己評価感情”は、溝上（1999）の自己評価尺度における“SOCIAL”との間に.64の相関が見られた。また、NPI-Sの中の

Table 3
各変数間の相関係数 (N=131)

	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.	12.	13.	14.	15.	16.	17.	平均 (SD)
1.	-.40***	.50***	-.46***	.79***	-.40***	.45***	-.49***	.42***	.57***	-.57***	-.22*	.16 [†]	.22*	.00	-.18*	.25**	9.05 (2.80)
2.		-.03	.48***	-.41***	.72***	-.21*	.38***	-.11	-.19*	.68***	.34***	.11	.15 [†]	.11	.17 [†]	.12	12.56 (2.34)
3.			-.42***	.48***	-.07	.64***	-.52***	.63***	.40***	-.31***	-.09	.27**	.24**	.04	-.16 [†]	.26**	9.31 (2.92)
4.				-.48***	.49***	-.29**	.78***	-.30***	-.21*	.59***	.41***	-.02	-.03	.07	.27**	.05	9.71 (2.76)
5.					-.33**	.53***	-.53***	.50***	.64***	-.51***	-.26**	.23**	.19*	-.14	-.20*	.24**	22.29 (5.07)
6.						-.10	.52***	-.08	-.14	.72***	.40***	.10	.07	.09	.22*	.16 [†]	25.15 (4.60)
7.							-.36***	.76***	.43***	-.31***	-.13	.28**	.19*	.02	-.08	.17 [†]	16.99 (4.82)
8.								-.33***	-.30***	.61***	.43***	-.11	-.15 [†]	.10	.28**	-.05	20.47 (5.41)
9.									.34***	-.27**	-.13	.27**	.20*	.01	-.02	.15 [†]	24.46 (6.74)
10.										-.26**	-.23**	.20*	.25**	-.10	.00	.35***	15.37 (3.03)
11.											.46***	.01	.04	.06	.27**	.11	14.44 (3.48)
12.												-.01	.12	.21*	.24**	.16 [†]	17.24 (4.98)
13.													.31***	.14	.03	.35***	18.84 (4.18)
14.														.43***	-.19*	.49***	13.17 (3.33)
15.															.07	.27**	7.87 (2.98)
16.																.04	21.40 (3.56)
17.																	18.60 (4.12)

[†].05 ≤ p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001.

注) 1. 個人基準－肯定的自己評価感情, 2. 個人基準－否定的自己評価感情, 3. 社会基準－肯定的自己評価感情, 4. 社会基準－否定的自己評価感情, 5. PERSON, 6. PERSON-N, 7. SOCIAL, 8. SOCIAL-N, 9. 優越感・有能感, 10. 自己受容, 11. 自己萎縮, 12. 否定的評価懸念, 13. 問題への取り組み, 14. 対人接触, 15. 陰性感情発散, 16. 自己統制, 17. 気晴らし・自己肯定

“優越感・有能感”との間には.63の相関が見られた。日常ストレス対処行動調査票に関しては，“問題への取り組み”との相関係数は.27，“対人接触”の間には.24，“気晴らし・自己肯定”との間に.26の相関が見られた。

“社会基準－否定的自己評価感情”は、溝上（1999）の自己評価尺度における“SOCIAL-N”との間に.78の相関が見られた。また、対人不安傾向尺度における“否定的評価懸念”との間には.41の相関が、日常ストレス対処行動調査票の“自己統制”との間には.27の相関が見られた。

短縮版自己評価感情尺度内の因子間の関係と溝上（1999）の自己評価尺度内の因子間の関係 短縮版自己評価尺度内における4因子間の関係と、溝上（1999）の自己評価尺度内の4因子間の関係との比較を行うために、まず、Table 4に溝上（1999）の自己評価尺度内の下位尺度相関を示す。なお、2つの尺度における因子同士の対応に関しては、仮説および因子分析の結果抽出された因子の内容

に沿って，“個人基準－肯定的自己評価感情”が“PERSON”と，“個人基準－否定的自己評価感情”が“PERSON-N”と，“社会基準－肯定的自己評価感情”が“SOCIAL”と，“社会基準－否定的自己評価感情”が“SOCIAL-N”と、それぞれ対応すると考えた。また、本来は、尺度を構成する因子間の相関関係のあり方を2つの尺度間で比較する際には、因子間相関行列によって比較する必要があると思われるが、溝上（1999）では肯定性次元項目と否定性次元項目とを

Table 4

溝上（1999）の自己評価尺度の下位尺度相関

	2	3	4
1	-.37**	.44**	-.53**
2		-.14**	.41**
3			-.49**

[†].05 ≤ p < .10, *p < .05, **p < .01, ***p < .001.

注) 溝上(1999)のp.126, 表4-7より筆者がまとめたもの。
1. PERSON, 2. PERSON-N, 3. SOCIAL, 4. SOCIAL-N

別々に因子分析しており、4因子における因子間相関行列が算出されていないため、下位尺度の相関の比較によって検討を行うこととする。

Table 3における“個人基準－肯定的自己評価感情”、“個人基準－否定的自己評価感情”、“社会基準－肯定的自己評価感情”、“社会基準－否定的自己評価感情”との間の各相関係数と、Table 4における“PERSON”、“PERSON-N”、“SOCIAL”、“SOCIAL-N”との間の各相関係数を比較した。その結果、“個人基準－否定的自己評価感情”と“社会基準－肯定的自己評価感情”との相関が $-.03$ と非有意であるのに対し、“PERSON-N”と“SOCIAL”、との間には $-.14$ と有意な相関が見られた。その他の因子間の組み合わせに関しては、相関係数の数値の差は $.03$ から $.07$ であった。

短縮版自己評価感情尺度の再検査信頼性の検討 短縮版自己評価感情尺度の再検査信頼性を検討するために、調査1と調査2における各因子同士の相関係数を算出した。その結果、個人基準－自己評価感情因子においては、“個人基準－肯定的自己評価感情”同士の相関が $.82$ 、“個人基準－否定的自己評価感情”同士の相関が $.75$ であった。また、社会基準－自己評価感情因子においては、“社会基準－肯定的自己評価感情”同士の相関が $.77$ 、“個人基準－否定的自己評価感情”同士の相関が $.78$ であった。

個人基準－自己評価感情因子と社会基準－自己評価感情因子との関係 個人基準－自己評価感情因子と社会基準－自己評価感情因子との関係を調べるために、両因子同士の相関係数や、他の尺度との相関係数との比較を行った。

肯定次元では、“個人基準－肯定的自己評価感情”と“社会基準－肯定的自己評価感情”との間に $.50$ の有意な相関が見られた。また、“優越感・有能感”に関しては、“個人基準－肯定的自己評価感情”も“社会基準－肯定的自己評価感情”もともに正の相関が見られたが（ $.42$ および $.63$ ）、後者の方が強い関係を持っていた（ $t_{(128)} = 2.96, p < .01$ ）。さらに“自己受容”との間には、“個人基準－肯定的自己評価感情”も“社会基準－肯定的自己評価感情”もともに正の相関が見られたが（ $.57$ および $.40$ ）、前者の方が強い関係を持っていた（ $t_{(128)} = 2.31, p < .05$ ）。

否定次元では、“個人基準－否定的自己評価感情”と“社会基準－否定的自己評価感情”との間に $.48$ の有意な相関が見られた。また、“優越感・有能感”に関しては、“個人基準－否定的自己評価感情”との間には有意な相関が見られなかったが、“社会基準－否定的自己評価感情”との間には $-.30$ の相関があった。なお、“自己受容”との間には、“個人基準－否定的自己評価感情”も“社会基準－否定的自己評価感情”もともに負の相関が見られたものの（ $-.19$ お

び $-.21$ ）、2つの相関係数の間に有意な差は見られなかった（ $t_{(128)} = .02, n.s.$ ）。

考察

短縮版自己評価感情尺度と溝上（1999）の自己評価尺度との関係 当初の仮説通り、短縮版自己評価感情尺度は、“個人基準－肯定的自己評価感情”、“個人基準－否定的自己評価感情”、“社会基準－肯定的自己評価感情”、“社会基準－否定的自己評価感情”の4因子から構成された。また、各因子を構成するとあらかじめ考えていた質問項目も、因子分析の結果、予想通りの因子内に分類されていた。以上のことから、概ね、因子妥当性は確認されたと考えられる。また、“個人基準－肯定的自己評価感情”と“個人基準－否定的自己評価感情”との因子間相関が $-.30$ “社会基準－肯定的自己評価感情”と“社会基準－否定的自己評価感情”との因子間相関が $-.48$ と、中程度以下の相関の値であることから、Owens（1993, 1994）の述べるように、個人基準においても社会基準においても、自己評価の肯定次元と否定次元とは、別次元のものとして捉えるのが望ましいと考えられる。

次に、同じ因子を測定していると想定していた溝上（1999）の自己評価尺度との関係においては、まず、“個人基準－肯定的自己評価感情”と“PERSON”との間には $.79$ の相関が、“個人基準－否定的自己評価感情”と“PERSON-N”の間には $.72$ の相関が見られた。また、“社会基準－肯定的自己評価感情”と“SOCIAL”との間には $.64$ の相関が、“社会基準－否定的自己評価感情”と“SOCIAL-N”の間には $.78$ の相関が見られた。いずれも高い相関係数であったことから、各因子の併存的妥当性は概ね示されたと考えられる。

ただし、本尺度内における因子間同士の関係と、溝上（1999）の自己評価尺度内における因子間同士の関係に関しては、“PERSON-N”と“SOCIAL”、との間には $-.14$ の弱い相関が見られたものの、本尺度における“個人基準－否定的自己評価感情”と“社会基準－肯定的自己評価感情”との間では有意な差は見られなかった。本研究の分析対象者は131名と少なかったため、今後、より多くの調査対象者を集めることで、因子の妥当性の検討を行っていく必要があると思われる。ただし、その他の相関係数の数値の差は $.03$ から $.07$ と、その差は比較的小さいかったこと、各因子の内容からは、短縮版自己評価感情尺度と溝上（1999）の自己評価尺度は、概ね同じ概念内容を測定していると考えられるのではないだろうか。

短縮版自己評価感情尺度の妥当性・信頼性 “個人基準－肯定的自己評価感情”因子は“自己受容”との間に $.57$ の相関が、“個人基準－否定的自己評価感情”因子は“自己萎縮の因子”との間に $.68$ の相関が

見られた。また、“社会基準－肯定的自己評価感情”因子は“優越感・有能感”との間に.63の相関が、“社会基準－否定的自己評価感情”因子は“否定的評価懸念”との間に.41の相関が見られた。いずれも予想通りの有意な、比較的高い正の相関関係が見られたことから、4因子の収束的妥当性は概ね示されたと考えられる。

次に、日常ストレス対処行動調査票に関して、“個人基準－肯定的自己評価感情”因子は、ストレス状況に対する積極的な対処方略と考えられる“問題への取り組み”との間に.16の有意傾向の相関と、消極的な対処方略と考えられる“自己統制”との間に-.18の相関が見られた。“個人基準－否定的自己評価感情”因子に関しては、“自己統制”との間に.17の有意傾向の相関が見られた。また、“社会基準－肯定的自己評価感情”因子は、ストレス状況に対する積極的な対処方略と考えられる“問題への取り組み”やとの間に.27の相関が、他者と接触することで積極的に対処しようとする方略と考えられる“対人接触”との間に.24の相関が見られた。“社会基準－否定的自己評価感情”因子に関しては、他者との接触を避けてストレスに対して消極的に対処しようとする“自己統制”との間に.27の相関が見られた。

しかし、“個人基準－肯定的自己評価感情”因子は、消極的な対処方略と考えられる“気晴らし・自己肯定”との間には、予想と反して.25の正の相関関係が見られ、“社会基準－肯定的自己評価感情”因子においても、“気晴らし・自己肯定”との間に、予想と反して.26の正の相関関係が見られた。“気晴らし・自己肯定”には、“頑張ろうと自分を励ました”のように、自己を肯定しようとする方略が含まれている。このような自己を鼓舞するような方法は、自分に対する自信がないと行いづら方法であると思われる。そのため、本研究では“個人基準－肯定的自己評価感情”因子や“社会基準－肯定的自己評価感情”と“気晴らし・自己肯定”との間に正の相関関係が見られたのかもしれないが、この可能性については、他の尺度と“気晴らし・自己肯定”との関係を調べる中で検討していく必要がある。

以上のように、“個人基準－肯定的自己評価感情”と“気晴らし・自己肯定”の間には予想と異なる相関関係が見られたものの、その他の日常ストレス対処行動調査票の各因子と短縮版自己評価感情因子4因子との相関係数の値がいずれも低かったことから、本因子の弁別的妥当性は概ね示されたと考えられる。

なお、信頼性に関しては、各下位尺度の α 係数が.70から.78であり、概ね内的整合性は認められたと思われる。また、再検査信頼性に関しては、個人基準－自己評価感情因子においては、.75から.82と比較的高い値であったことから、ある程度の再検査信頼

性が確認されたとと言える。

個人基準－自己評価感情因子と社会基準－自己評価感情因子の比較 個人基準－自己評価感情因子と社会基準－自己評価感情因子との間には、肯定次元同士においても否定次元同士においても、比較的高い正の相関関係が見られた。“個人基準－肯定的自己評価感情”と“社会基準－肯定的自己評価感情”との間、また、“個人基準－否定的自己評価感情”と“社会基準－否定的自己評価感情”との間には、評価する際に参照する基準に違いはあるものの、ともに全体的自己に対する評価感情を測定している点では共通しているため、比較的高い相関関係が見られたのではないだろうか。しかし、Table 3に見られるように、他の尺度との関係は両尺度の間に差異が見られた。

まず、“優越感・有能感”に関しては、“個人基準－肯定的自己評価感情”も“社会基準－肯定的自己評価感情”もともに正の相関が見られたものの(.42および.63)、後者の方が強い関係を持っていた。その一方で、“個人基準－否定的自己評価感情”との間には有意な相関が見られなかったものの、“社会基準－否定的自己評価感情”に関しては-.30の負の相関が見られた。以上のことから、“優越感・有能感”においては、自分の基準より自分が良いと感じるか悪く感じるかよりも、社会の基準より良いと感じるか悪く感じるかが強く関係すると考えられる。

また、“自己受容”に関しては、“個人基準－肯定的自己評価感情”も“社会基準－肯定的自己評価感情”もともに正の相関が見られるものの(.57および.40)、前者の方が強い関係を持っていた。その一方で、“個人基準－否定的自己評価感情”と“社会基準－否定的自己評価感情”に関しては、ともに負の相関が見られたものの(-.19および-.21)、両者の数値に有意な差は見られなかった。

このように、個人基準と社会基準、肯定次元と否定次元の違いによって、全体的自己に対する評価と、“優越感・有能感”や“自己受容”との関係は異なっていた。したがって、自己評価感情に関しては、個人基準と社会基準の区別を行うことと、肯定次元と否定次元の区別を行うことが重要であると考えられる。また、本研究では、不安やうつなどの心理的健康に関係する変数は扱わなかったが、これらの変数に関しても、それぞれの基準および各次元の自己評価感情ごとに関係が異なる関係を持つ可能性も考えられる。今後、全体的自己に対する評価を上記のように区別した上で、他の心理的変数との関係を検討していく必要があると思われる。

まとめと今後の課題

本研究では、溝上(1999)に従い、肯定次元と否定次元の区別と、個人と社会の評価基準の区別を行った

上で、項目数の少ない短縮版自己評価感情尺度を作成した。“個人基準－肯定的自己評価感情”と“気晴らし・自己肯定”の相関および“社会基準－肯定的自己評価感情”と“気晴らし・自己肯定”の相関は予想に反して正となったものの、その他は予想通りの相関関係が他の尺度との間に見られ、各因子の併存的妥当性、収束的妥当性、弁別的妥当性は概ね認められた。また、内的整合性と再検査信頼性についても比較的高い値が得られ、各因子の信頼性が概ね確認された。以上のことから、本研究で作成した短縮版自己評価感情尺度は、溝上（1999）の自己評価尺度の短縮版として位置づけられると考えられる。また、本尺度により、自己評価感情を、肯定次元と否定次元ごとに、短時間で測定できるようになったと考えられる。

従来の自己評価尺度では、個人基準における自己評価と社会基準における自己評価との区別は十分になされてこなかった。そのため、たとえば同じように肯定次元の自己評価が高い者の場合でも、個人基準の自己評価も社会的な基準の自己評価もともに高い者と、個人基準の自己評価は高いが社会的な基準の自己評価は低い者とを区別することはできなかった。本尺度により、このような区別が可能になる可能性が考えられる。

しかし、本研究には以下の問題があると思われる。まず、“個人基準－否定的自己評価感情”の中には点数が高得点に偏っている質問項目があった。本研究では、青年期の特徴としての自己の否定性によって質問項目の平均値が高くなった可能性が考えられること、これらの項目内容自体が個人差の判別が不可能な項目とまでは言えないと考えたことや、この項目を含む因子全体の平均値とSDの値の検討の結果、これらの項目を削除せずに採用した。しかし、本尺度を用いる際には天井効果に注意する必要がある。回答を7件法などで行ったり、項目の表現の検討を再度行ったり、項目数を増やして尺度を新たに構成し直すことなども必要であると思われる。

また、弁別的妥当性の検討のために用いた、日常ストレス対処行動調査票における“気晴らし・自己肯定”と“個人基準－肯定的自己評価感情”および“社会基準－肯定的自己評価感情”との間には、予想に反して正の相関が見られた。そのため、他の自尊感情尺度と“気晴らし・自己肯定”との間にも正の相関が見られるのかを改めて検討し、弁別的妥当性の検討を行う必要があると言える。また、本研究では扱わなかった尺度との妥当性を検討していく必要もあるであろう。

最後に今後の研究の方向性としては、自己評価感情と精神的健康や適応との関係を検討することが考えられる。臨床現場において自己評価感情に対して行われる心理的支援としては、自己のよい側面を伸ばすなどして肯定的自己評価感情を育む支援や、自己に対する

否定的感情を受け止めてゆくなどして否定的自己評価感情を和らげる支援があると思われる。また、高すぎる評価基準を自分で設定している場合には個人基準の自己評価基準を下げるようにして自己評価感情の改善を図る支援もあれば、社会においても認められるレベルを目標にして自己のよい部分を育てたりや悪い部分を改善していくことで自己評価感情の改善を図る支援もある。しかし、肯定次元と否定次元の区別や評価基準の区別がされていない従来の尺度では、肯定次元と否定次元のどちらの自己評価感情へ介入を行うのが有効なのかを調べたり、自己基準と社会基準のどちらに介入するのが望ましいのかを検討することはできなかった。本研究で作成した尺度を用いることで、自己評価の問題を抱えた方に対する心理的支援方法の有効性をこれまでより細かく、また対象者にかかる負担がより少ない中で検討することが可能になると考えられる。

文献

- Bandura, A. (1977). Self-Efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, **4**, 1-44.
- Coopersmith, S. (1967). *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: Freeman.
- Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001). Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, **108**, 593-623.
- Diener, E., & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 653-663.
- 遠藤由美 (1999). 自尊感情 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編) (1999). 心理学辞典 有斐閣 pp.343-344. (Endo, Y. (1999). Self-esteem. In Y. Nakajima, K. Ando, M. Koyasu, Y. Sakano, K. Shigemasu, M. Tachibana, & Y. Hakoda. (Eds.), *The Yuhikaku dictionary of psychology*. Tokyo: Yuhikaku. pp.343-344.)
- 古野裕子 (2005). 過換気症候群を抱える人のコピーング・スタイルおよび心理的構えについての一考察. 心理臨床学研究, **23**, 64-74. (Furuno, Y. (2005). A study on the coping style and the psychological posture of hyperventilation syndrome patients. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **23**, 64-74.)

- 平石賢二 (1993). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (II) - 重要な他者からの評定との関係. 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, **40**, 99-125. (Hiraishi, K. (1993). A study on the development of self-consciousness in adolescence (II): The relation between self-consciousness and perceived self by significant others. *Bulletin of the School of Education, Nagoya University (Educational Psychology)*, **40**, 99-125.)
- James, W. (1891). *Psychology: Briefer Course*. ジェームス, W. 今田恵訳 (1956) 心理学 岩波書店.
- 粕谷貴志・河村茂雄 (2004). 中学生の学校不適応とソーシャル・スキルおよび自尊感情との関連-不登校群と一般群との比較-. カウンセリング研究, **37**, 107-114. (Kasuya, T., & Kawamura, S. (1999). The relationship between maladaptation and social skills, as well as self-esteem in junior high school students: Comparison between school nonattendance and attendance. *Japanese Journal of Counseling Science*, **37**, 107-114.)
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal and coping*. New York: Springer Publishing Company. (ラザルス, R. S., ・フォルクマン, S. 本明 寛・春木豊・織田 正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学 - 認知的評価と対処の研究 - 実務教育出版)
- 松尾直博・新井邦二郎 (1998). 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係. 教育心理学研究, **46**, 21-30. (Matsuo, N., & Arai, K. (1998). Relationship among social anxiousness, public self-consciousness and social self-efficacy in children. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 21-30.)
- 溝上慎一 (1999). 自己の基礎理論 - 実証的心理学のパラダイム. 金子書房. (Mizokami, S. (1999). *Basic theory of the self: The paradigm of empirical psychology*. Tokyo: Kaneko Shobo.)
- Moretti, M. M., & Higgins, E. T. (1990). Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 108-123.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連. 性格心理学研究, **8**, 1-11. (Oshio, A. (1999). Narcissistic tendency and friendship in high school students. *The Japanese Journal of Personality*, **8**, 1-11.)
- Owens, T. J. (1993). Accentuate the positive and the negative: Rethinking the use of self-esteem, self-deprecation, and self-confidence. *Social Psychology Quarterly*, **56**, 288-299.
- Owens, T. J. (1994). Two dimensions of self-esteem: Reciprocal effects of positive self-worth and self-deprecation on adolescent problems. *American Sociological Review*, **59**, 391-407.
- Pyszczynski, T. & Greenberg, J. (1987). Self-regulatory perseveration and the depressive self-focusing style: A self-awareness theory of reactive depression. *Psychological Bulletin*, **102**, 122-138.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Tafarodi, R. W., & Swann, W. B. Jr. (1995). Self-liking and self-competence as dimensions of global self-esteem: initial validation of a measure. *Journal of Personality Assessment*, **65**, 651-672.
- 辻裕美子・塚本尚子・岡田宏基・近喰ふじ子・川田まり・杉江征・永田頌史・宗像恒次・吾郷晋浩・石川俊男 (1999). 日常ストレス対処行動の評価尺度の作成. 精神保健研究, **12**, 53-61. (Tsujii, Y., Tsukamoto, N., Okada, H., Konjiki, F., Kawata, M., Sugie, T., Nagata, S., Munakata, T., Ago, Y., & Ishikawa, T. (1999). Construction of a scale for measuring coping strategies in daily life. *Journal of Mental Health*, **12**, 53-61.)
- 内田圭子 (1990). 青年の生活感情に関する研究. 教育心理学研究, **38**, 117-125. (Uchida, K. (1990). A study of life-feelings in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **38**, 117-125.)
- 内田由紀子 (2008). 日本文化における自己の随伴性. 心理学研究, **79**, 250-256. (Uchida, Y. (2008). Contingencies of self-worth in Japanese culture: Validation of the Japanese contingencies of self-worth. *The Japanese Journal of Psychology*, **79**, 250-256.)

謝辞：自己評価尺度（溝上，1999）の短縮版の作成を快諾して下さった京都大学高等教育研究開発推進センター教授の溝上慎一先生に、心より感謝申し上げます。